



# 多様性の中にある協同組合らしさ

大高 研道

## 体験的な学びの大切さ

体験的な学びの重要性は、高等教育を含めた近年の学校教育においてもっとも重視されている試みのひとつである。実際にボランティアや地域活動に参加した学生のおどろくほどの成長ぶりには喜びを感じるとともに、教授型の講義を中心とした教育に慣れ親しんだものにとっては、教育者としてできることの限界を思い知らされることしばしばである。

「命題知」から「実践知」への学びの転換の重要性は、今や教育界の常識となっている。今日ではインターンシップを実施している企業や協同組合も多いが、それは将来的な企業の人材確保・育成という側面だけでなく、学生にとっても実践的な学びを通じた人間的成長の重要な契機になっている。

もちろん、経験主義の過度な強調には多くの危うさも伴う。とくに社会経験の少ない子ども・若者にとっては、諸刃の剣ともなろう。しかしながら、それでも、多様な他者との出会いの機会が得られるボランティアや地域活動への参加は、世界観を広げ豊かにする多くの種を私たちの心に蒔いてくれる。

## なぜ、多様な他者との交わりが大切なのか

「コミュニティ」を、「協同的で相互作用的な関係性・つながり」と理解するならば、地縁的であれ、志縁的であれ、人びとの結びつきの希薄化はひとつの現代の特徴といえる。そのプロセスにおいて我われが失った最大のものは「多様性」であろう。

数年前、私が担当している「地域社会論」という講義で、パットナムが整理した2つのつな

がりの形「結束型社会的関係資本 bonding social capital」と「橋渡し型社会的関係資本 bridging social capital」について、そのどちらを重視するかというディベートを行ったことがある。ここでは、さしあたり前者は同質的で、どちらかといえば狭い仲間関係、後者は価値観やバックグラウンドが異なる人びとが緩やかにつながる形と理解しておこう。単純化・抽象化された人間関係のあり方を議論すること自体あまり建設的な試みとは言えないのだが、興味深かったのは大半の学生が前者を選んだということだ。それが排他的で狭い仲間集団であることやそれを失った時の怖さを自覚しながらも、非常に限定された親密圏に安定を求める傾向が強いことが印象に残っている。

子ども、若者、高齢者、障害者、生活困窮者、外国人、他地域に住む人びと（都市と農村）等々、多様な人びととの交流は多文化・異文化理解を深める。そのような体験は、他者の痛みや喜びの「シェア」の源となる。そして、多様な人びとの営みによって成り立っている自らの命や暮らしへの気づき、すなわち「関係性への想像力」を豊かにすることにもつながっていく。いま飲んでいる水はどこから流れてきて、どのような人びとの営み（森林や河川を維持・管理する仕事、環境問題に取り組む行政や市民団体の働き等々）によって実現しているのだろうか。世界中で貧困に苦しんでいる人びとの暮らしはどのようなになっているのだろうか。今福島では何がおきているのだろうか…。

## 違いを認め合う関係は多様性の中で生まれる

多様な人びととの交わりは、他者との違いや

「浮いている」ことを極端に避け、同質性を求めがちな私たちの意識構造を変え、肩の力を抜いた生き方を受容しあう社会の建設にとっても重要な意味を有している。

東日本大震災直後、大学で企画した復興支援ボランティアを引率したある教員が腰痛持ちであることを心配していた。数日間の支援活動から戻ってきた際にそのことをたずねたら、「意外と大丈夫でしたよ」という言葉が返ってきた。ボランティアの中には中高齢の方もたくさん参加しており、流動的で柔軟な作業空間が自然と生まれたそうである。そこには、多様な能力や存在を認め合う空間があったのではないかと推察している。

そのような空間は、元気で体力があるとみなされがちな若者にとっても重要な意味を持っていたように思われる。狭い親密圏で生活していると、同質的であろうとする意識が強く働く。しかし、若者だって体力や興味・関心、得意なことは異なる。障害者や高齢者など、これまであまり付き合いのなかった「異質な人びと」との協同作業を通して、「強い」と思われがちで、自らも「強く」あろうとする若者たちにとっても、安心して弱さをさらけ出してよいのだという思いとともに、救われることもあるのではないだろうか。

違いを認め合う関係は、自己存在の意味をも認識する契機となる。そして、それは多様性の中でこそ生まれる。

### 立ち位置を変える

多世代・異質者との交流は、必然的に多面的な角度から物事をみることの意味を教えてくれる。それを世界観の広がりといってもよいかもしれないが、ここでは「立ち位置を変える」という観点から考えてみたい。

ふたたび大学での講義の話になってしまう

が、今も昔も90分間の講義に集中することは、教員・受講生双方にとって並大抵なことではない。ところが、教育実習から戻ってきた学生が受講生の中にいると、やりやすさは格段に向上する。同じようなことは、報告や司会を学生主体で行うゼミにも言えることなのだが、いつもは教わる立場にいる学生が教師として教壇に立つことによって、これまでとは全く違う景色や物事がみえてくる。そうすると「90分も興味を持たせるような講義をするのは大変ですね」などといってくれるのである。

翻って、そのことを協同組合の現在の姿に重ね合せてみるとどうなるであろうか。商品経済の高度化にともなって事業の大型化を進めてきた多くの協同組合では、組合員・職員・役員の役割は分化し、「協同関係」は一方通行化しがちであることは、参加と民主主義を標榜する多くの協同組合関係者の悩みとなっている。そのなかで、とくに組合員は消費者・利用者・顧客化し、立ち位置や役割は固定化しているのが現状であろう。そこに真の協同組合らしさはあるのか。

もちろん、「昔に戻れ」という主張では無理難題というよりは、言いがかりに近い。では「協同組合らしさ」を実現するために出来ることは何か。そのことを考えるためのひとつの鍵が、常に立ち位置を変えてみるという営みの中にあるのではないだろうか。職員は組合員として、組合員は職員として、さらには利用者や職員という枠を超えた地域住民・市民として自らの組織を見つめ直す。

いろいろな人びとが集える空間の創造と、多様な立場から物事を見て話し合い学びあう対話的關係の再構築こそが「協同組合」であり続けるための条件であろう。

(聖学院大学 教授)